慶應義塾 醫学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●診療時間＝午前9時～午前11時
●電話＝（3353）1211（大代表）

速報 共用施設棟建設計画始動

最先端の医科学研究への対応視野に

七月二十四日の教授会において、共用施設棟（仮称）の新築工事概要が発表された。地上五階、地下一階、延べ面積五千六六〇㎡の規模で、旧厚生学院跡地に建設される。当初は仮設の研究棟で対応する予定であったが、仮設の建築・解体に多額の費用を必要とすることから新築することになった。本年九月より建設予定地の整備が始まり、平成十九年末に完成予定である。

この施設棟は、最先端の医科学研究への対応を可能とするために、実験設備の更新のしやすさ、研究レイアウトの自由度を確保すること、病院建て替え時の一時移転受け入れ対応を考慮し、大学施設、医療施設の受け入れを可能にすること、内部工事で上下階に影響を与えない構造にするなど、フレキシビリティーの高い施設になる予定である。詳細は次号以降に報告する。

外部資金導入による寄付講座推進

初代医学部長の北里柴三郎先生が慶應医学の進むべき道、方向を示し、我が慶應医学部が誕生してから二〇一七年で創立百周年を迎えます。北里先生により示された「基礎と臨床の融合した、一家族の如き…」の基本方針を、我々はこの九十年間にどれだけ実行し、その結果を世界に向け発信出来たでしょうか。常に日本の医学・医療のトップランナーとして走り続けることが求められてきた慶應医学を北里先生は今どのように評価してくれるでしょうか。医学部、病院は現在置かれている状況を正確に把握し、評価し、慶應としての確固たる座標軸を持たなければなりません。そして「次の百年」、二十二世紀を見据えた慶應医学の将来展望、方向性を明確に示すことも必要となっています。つまり、最近小泉内閣から示された「骨太の方針」のような基本戦略、目標が慶應医学にも求められています。幸いにも現在、執行部が中心となって医学部の将来構想について検討に入っています。素晴らしい企画、基本戦略が示されることを期待しております。

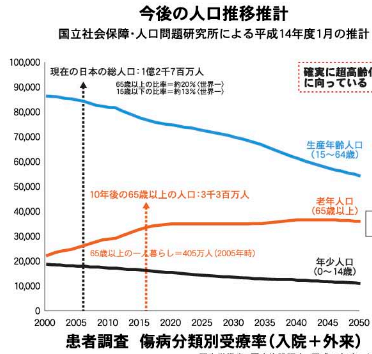
信濃町リノベーション 〈第6章〉

副病院長
整形外科教授　戸山　芳昭（54回）

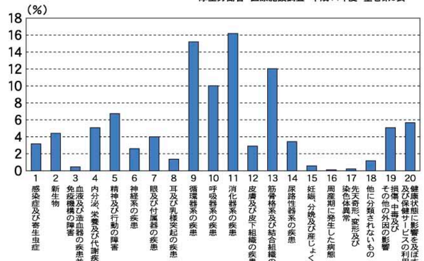
さて、医学・医療も一般社会と同様に極めて国際化、流動化してきた現在、慶應の医学・医療の現状を正確に分析した上で、日本の人口動態や疾患動態などのデータを参考にし、さらには採算性、発展性等も考慮した診療体制再編が求められています。まず日本の人口動態は図1のように少子化、高齢化が益々進むはずであり、この人口動態に合った診療体制を整備しておく必要があります。そして疾患も大きく変化している現在（図2）、池田医学部長、日比教授（内科学）らが進めている診療クラスター構想も大きな力となるはずです。そのための準備として、慶應もより積極的にこの診療クラスター構想と連動した寄付講座開設を推進する必要があります。実際、国立の雄である東京大学では二十二世紀トランスレーショナル・リサーチセンターなどが次々と企画され、スタートしています。それて数多くの寄付講座が承認され、活発な研究活動を開始しています。独法化したとはいえ、国立大学が積極的に先を見据えて動き出しているのです。

（2面へつづく）

今後の人口推移推計
国立社会保障・人口問題研究所による平成14年度1月の推計



患者調査　傷病分類別受療率（入院＋外来）
厚生労働省　医療施設調査　平成14年度　上巻第5表



池田医学部長ら ルンド大学医学部を訪問

二〇〇六年六月十三日から十五日にかけて、池田康夫医学部長及び関係者数名が、スウェーデンのルンド大学医学部を訪問し両学部間の学術交流について協議した。

今回の訪問は、独立行政法人・日本学術振興会による先端研究拠点事業（拠点形成型）「幹細胞生物学・再生医学の拠点連携（代表・須田年生教授）」により実現した。医学部ではすでに文部科学省による二十一世紀COEプログラムとして「幹細胞医学と免疫学の基礎・臨床一体型拠点」（拠点リーダー：岡野栄之教授）が採択されており、本邦のみならず海外に於いても高い評価を得ている。本事業はこのCOEプログラムとも密接に関連し、ルンド大学幹細胞研究所との神経および造血幹細胞研究を中心とした積極的な研究交流を通して、幹細胞研究の臨床応用への道を切り拓いていくことをねらいとしている。また本事業では若手研究者を中心としたセミナーの開催や短期・長期留学を促進し、ルンド大学に留まらずヨーロッパひいては世界における幹細胞研究ネットワークの拡大を計画している。

ルンド大学では、Sten Eirik Jacobsenルンド幹細胞センター長およびStefan Karlsson教授によるセンター紹介、ルンド大学病院や研究室の見学、ワークショップ、ルンド大学と慶應義塾大学の双方の研究者によるミニシンポジウム等が行われ、今後の研究交流計画について活発な協議が行われた。

ルンド大学（Lund University）は、スウェーデン南部にある北欧有数の高等教育機関。一六六六年の設立より今日まで、数百年にわたる歴史や伝統を維持しながらも、高等教育と科学研究の現代化の中心として、スウェーデン国内だけでなく国際社会をリードしている。

ルンド大学幹細胞研究所の研究者とのキックオフミーティングにて

（参考）
■独立行政法人・日本学術振興会による先端研究拠点事業
http://www.jsps.go.jp/j-bilat/core_to_core/index.html
■先端研究拠点事業（拠点形成型）「幹細胞生物学・再生医学の拠点連携」
http://web.sc.itc.keio.ac.jp/celldiff/Lund/index.html
■21世紀COEプログラム「幹細胞医学と免疫学の基礎・臨床一体型拠点」
http://www.coe-stemcell.keio.ac.jp/
■ルンド大学
http://www.lu.se/o.o.i.s/450
■ルンド大学幹細胞研究所
http://www.stemcellcenter.se/

北京大学医学部と協定締結

二〇〇六年五月十一日から十三日にかけて、池田康夫医学部長と日比紀文教授（消化器内科）は、北京大学常任副学長であり医学部代表の柯楊教授の招聘により、北京大学医学部を訪問した。

十一日、池田医学部長と日比教授は、北京大学医学部で北京大学常任副学長医学部（代表）柯楊教授、副部長方偉剛教授、医学部基礎医学院院長顧江教授、医学部教育部部長辛平教授、医学部天士力微小循環センター韓晶岩センター長らと会見した。その後、免疫学教室と微小循環研究センターを見学し、懇親会では学生の短期研修や教室間の交流、共同臨床研究等、今後の交流可能な分野について活発な意見交換を行った。

翌十二日、北京大学医学部会議センターにおいて、両学部の友好関係提携記念講演と調印式が行われた。記念講演会では池田医学部長が「慶應義塾大学医学部における教育・研究・診療」について、日比教授が「慶應義塾大学医学部消化器内科における卒業後教育」について講演した。講演会には北京大学医学部の教授や院生など約六十名が集まった。

講演終了後、池田医学部長は北京大学常任副学長医学部（代表）柯楊教授より客員教授証書を授与された。

日本と中国を代表する両医学部が友好関係を締結し交流を密にしていくことは、日中相互の診療、教育及び研究の発展にも大いに寄与することとなり、大変意義深いものと考えている。

医学部長による記念講演

（参考）■北京大学ホームページ
http://www.bjmu.edu.cn/200411/article/2006-05/11707.htm

比企能樹三四会長を慶應義塾第32期評議員に推挙

三四会杉並支部長　山田　淑儿

慶應義塾医学部同窓会（三四会）比企能樹会長が慶應義塾第三十二期評議員に立候補されることを決意された。

それを受けて去る平成十八年六月五日三四会内に「比企能樹君を応援する会」の実行委員会が三四会理事会をコアに結成され着々と選挙準備が行われている。さらに六月十七日の医学部三四会評議員会において全員一致で会長を評議員に推薦することが決定された。

本塾の規定により新しく立候補する場合、塾員百五十名以上の推薦人の署名を必要としていて、この推薦人百五十名以上を集めたうえで、来る八月二十八日に行われる慶應義塾全体の選挙が実施される予定である。全塾約三十四万人の投票で当落が決定するので事実上医学部塾員五千名のうち教職員を除いて三千票以上を獲得する必要がある。

比企会長は、全塾の評議員に占める医学部の人数（現行三人）の少なさを危惧され、多額の私費を自ら寄付され、心血を注いで医学部のために必死になっておられる。連日、深夜まで多くの三四会員や三田漕艇会にも協力を要請して選挙活動を展開中である。

慶應義塾全体にしめる予算の割合から、医学部のさらなる発言権を強くして、慶應義塾創立百五十年の三年後にやってくる医学部百周年記念に医学部の老朽化しつつある施設を一新して新棟を建てたい考えである。

私見を捨て、医学部のために必死に頑張っておられる姿に三四会員諸氏の暖かいご支援を賜りたい。

（42回）

比企さんの意気と和と先見の明 さらにめぐり合わせに大いに期待

医療法人三禄会
おやまにし病院長　田中　勧

「スタートでぶち抜いて、…、慶應の選手は意気で漕ぐ、…」、昭和29年学部端艇部（ボート部）に入ってから52年間、比企さんは何十回、何百回とこの応援歌をわれわれとともに声張り上げて歌い、口ずさみまた脳裏を駆け巡らしたことでしょう。私が比企さんと共にレースに臨んだのは昭和30年第18回の慶應と東大の医学部の対抗戦。8艇身の大差で勝ち、村山主将（現日本医師会副会長・土佐県医師会長）の呼びかけで疲れきっても歓びに満ちた艇から隅田川上の綺麗な夕日を見上げた50年前のことが昨日のように思い出される。スポーツでは誰もが身体、技を鍛えるがそれを強靭のものにするには踏ん張り、根性など精神力が根底にあります。比企さんはオリンピック選手です。このことは七十余年の人生の支えであり、また、負担でもあったでしょう。オリンピック選手になろうといくら努力しても先ずなれないところ、比企さんのように一医学部学生がボートでオリンピック選手になったことは日本ではもとより世界でも皆無でしょう。慶大の代表エイトのメンバーに選ばれ、よくハードな練習に耐え、あの全日本選手権決勝では強力京大を追い、2、000メートルのゴール寸前で抜き僅か1尺、慶大は意気の差で勝ち、オリンピック代表になれた。比企さんは、医学部の3年生これは他学部では卒業1年目、クルーでは最高年齢であり、和の中心でしたでしょう。実力があったからこそ選ばれ、このめぐり合わせの良さも実力のうちでしょう。一方、京大クルーの悔しさはこの上なく1尺会を作って毎年会っていると聞いている。ボートには〝一艇ありて一人なし〟という言葉があります。エイトでは漕手は8人いるがコックス（舵手）の号令下にひたすらゴールに向って艇が着くまで皆で漕ぎぬき、そこにはスターは居ない。艇が早くゴールインすべく漕手は前に合わせ、バランスをとりながら全力で漕ぐ。ボートは見かけは単純ですが、一本一本に心技体が込められています。比企さん家は親子三代、兄弟も学生時代ボートに打ち込んだ一家であることから、ボートの良さが家庭に靡いているのでしょう。

比企さんはオリンピックを目指してボート部に入ったとは伺っていないが、そうだとしたら、並外れた先見の明か。外科では胃カメラ、内視鏡を手がけ、今日では診断のみでなく治療手段にも発展された分野を早くから手がけたことは正に先見の明といえる。

比企さんは北里大学医学部創設時に赴任されその後のご尽力はここに申すまでもないが、当時神奈川県漕艇協会の創設者、初代名会長富田信男（8回生）先生ご他界後、故新井正夫教授（北里大産婦人科）の後を継いで3代目の神奈川県漕艇協会長として最近までご貢献されていました。神奈川県に新設された北里大学に比企さんは赴任されていたからのことであり、協会にとってもこの上ないよきめぐりあわせであったと思います。頼れば何でも引き受けて、意気と和、先見の明を発揮して頼んだ人、皆が納得いく成果を着実に出してくれる比企さんを多くの人、組織がそのご多忙を省みず依頼し、解決を望んでいる。

この度、比企さんは三四会会長になられたことから慶應義塾の評議員として立候補されたわけです。これは塾にとっても比企さんにとっても素晴らしいめぐり合わせになるといえましょう。

これからは比企さんは医学の分野に止まらず、広く学生教育のあり方と慶應スポーツの新たな発展を視野に入れて、持ち前の意気を基に、評議員として大いにご活躍されることを確信する一人としてここに推薦致す次第です。

（38回）

助教授講師会へ感謝状

難病と戦う子供たちの夢を叶える団体 メイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパンから

医学部の助教授講師会（会員数百四十人、加入率九三%）は、平成十二年から、予算の余剰金を活用して寄付活動を行っています。会員からアイデアを募り、このなかから投票により、毎年一―二件（一件百万円）を選定しております。対象は医学部、塾に限らず日本、世界の「我々が応援すべき活動」です。原則として、活動の内容が具体的で、寄付金の使途が明確であり、使途についての報告が一年以内に可能な組織に対して寄付を行っています。

今年度、寄付させていただいた「メイク・ア・ウィッシュ　オブ　ジャパン」から会計報告とともに、感謝状をいただきましたので、紙面をお借りして報告申し上げます。

「メイク・ア・ウィッシュ」についての詳細はホームページhttp://www.mawj.org/d.htmlでご覧いただければと思いますが、簡単に紹介しますと、難病とたたかっている子どもたちの夢をかなえ、生きる力や病気と闘う勇気を持ってもらうことを願って、一九八〇年にアメリカで発足したボランティア団体です。メイク・ア・ウィッシュ　オブ　ジャパンは一九九三年に「遊園地に行きたい」という夢をかなえたことを第一歩として、その後「野生のイルカと泳ぎたい」「ウルトラマングレートと一緒に闘いたい」「世界一大きいヘラクレスオオカブトムシに触りたい」「サンタクロースと遊びたい」等など、多くのすばらしい夢をかなえる手伝いをされてきました。今回、助教授講師会からの寄付で「サイパン・マニャガハ島に行きたい」という子供の夢が実現し、さらに十五家族分のディズニーランドの切符を購入予定との報告を受けました。

余剰金の活用方策など、助教授講師会の活動に関し、アイデア、アドバイスがあれば、会員以外の方でも結構です、遠慮なく下記の役員へご連絡ください。

会長：永田博司（内科）
幹事：粟津　緑（小児科）、島田直樹（衛生学公衆衛生学）、末岡　浩（産婦人科）、堀　進悟（救急部）、松本秀男（整形外科）、三谷芙美子（医化学）

（永田博司　内56回）

鑑往知来

一九四九年、ハーバード大学のジップ教授は、人間社会に関する非常に興味深い観察結果を発表した。一九二〇年におけるアメリカの都市を、居住人口によって順位付けしてみると、人口二位の都市の人口は一位の都市の人口の二分の一、三位の都市の人口は三分の一、十位の都市は十分の1といった関係が、さらに五十位、百位といった順位に至るまで認められるというものである。驚いたことに、都市人口に関するこのような規則性は、過去から現代までのアメリカの歴史を通じてほぼ当てはまる上、世界の国々や地域の都市人口に関しても凡そ妥当するものだということが知られている。この規則性は発見者の名前を取ってジップの法則と呼ばれているが、この法則は、一般的には、サイズがn番目に大きい要素が全体に占める割合がn分の一に比例するという経験則であり、この世界の様々な自然現象や社会現象などで成り立つことが明らかにされている。例えば、固体が割れたときの破片の大きさ、地震の規模、単語の使用頻度、ウェブページへのアクセス頻度、上位三%の人々の収入、細胞内での遺伝子の発現量などである。この法則に関する包括的理論化は成功していないが、偶然性に従った分布のパターンと考えることができる。筆者はビジネススクールに留学した際、この現象に興味を持ち、関連する研究を行った。実は、ビジネス、スポーツ、学術等、この世における様々な競争における成績分布は、ほとんどの場合、偶然性を基にした理論的分布（シミュレーション）によっても説明可能なことが証明できる。規制改革の流れの中、「結果の平等」から「機会の平等」へといった議論が盛んであるが、人間にせよ、企業体にせよ、同様の資質をもったプレーヤーが、同様の努力をして競っても、その結果は、偶然性によって大きく左右される。単なる結果の優劣や大小だけで、事物の価値を判断する傾向には再考が必要だろう。

（古川俊治　外66回）